様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６３６４８

研究課題名（和文）若年性認知症者および高齢認知症者の本来感を高めるコミュニケーションスキルの開発

研究課題名（英文）Development of communication skills to appropriately comprehend authenticity in individuals with early onset dementia and elderly people with dementia.

研究代表者
千葉　京子（chiba, kyoko）

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：４０２４８９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は認知症ケアの向上を図るため、認知症者の本来感を高めるコミュニケーション・スキルを開発することである。若年性認知症者の活動場面では、パッシング（取り繕い）という印象操作が見られ、スタッフは認知症者の面子を保つために行う丁寧な配慮としてパッシングするケアを行っていた。外来診察場面では認知症高齢者は医師による質問に対する応答として、付き添い家族を指名するというパッシングを行っていた。また、若年性認知症者は記憶障害による日常生活のトラブルをユーモアにするコミュニケーション・スキルを実践していた。
　認知症者の本来感は、対人関係の親密さや活動の場に影響を受けている可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop communication skills to appropriately comprehend the sense of authenticity in people with dementia and plan improvement of dementia care. During interaction with individuals with early onset dementia, impression operation, called passing (repair), was observed, and staff performed passing care as polite consideration to keep the face of people with dementia. Elderly people with dementia performed passing by appointing an attendant family member to reply to questions posed by doctors in outpatient department medical examination situations. People with onset early dementia practiced communication skills concerning trouble they experience in daily life and actions because of memory defect by using humor. The study suggests the possibility that the sense of authenticity in people with dementia can be affected by enhancement of the place of interaction and by personal relationships.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症者　コミュニケーション　本来感　会話分析　高齢者　若年性

１．研究開始当初の背景

2012 年厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチームは「今後の認知症施策の方向性」を発表し、認知症者が住み慣れた地域で生活を続けていくためのサービスが十分でないこと、医療職と介護職の連携がとれていないこと、医療・介護サービスを担う人材の育成などを示し、認知症者の意思を尊重し住み慣れた地域で生活できるサービスの必要性を述べている。サービス体系の組織化も重要であるが、認知症者と直接的にどのように関われば彼らの意思を尊重することが出来るのか、そのケアについては言及されていない。個別性の高い認知症ケアを提供するには認知症を正しく理解する知識とともに、認知症者とのコミュニケーションスキルの獲得が重要であろう。

コミュニケーションスキルを検討する方法の１つに会話分析が活用できる。会話分析とは会話(もしくは相互行為)において、どのような構造と秩序があるかを解明しようと試みるものである。会話分析は言語それ自体を研究対象とするように思えるが、そうではなく会話を通じて行われる人々の相互行為を分析するものである。会話分析という名称はこのアプローチにふさわしくないと異論を述べ、「エスノメソドロジー的相互行為分析」という名称を推奨している研究者もいるが、本研究では一般的に使われている会話分析という名称を用いる。会話分析は社会学者や言語学者の立場から医療現場のコミュニケーション研究などに用いられているが、看護学では産科医療領域と高齢者看護領域で用いられ始めてきた。高齢者看護領域では、小山(2009)がグループホームの生活の中で、優先応答体系という日常会話の構造の規範が高齢認知症者に内在していることを明らかにした。

そこで本研究は、認知症者の意思を尊重するコミュニケーションスキルを考えるならば研究参加者を高齢認知症者に限定せず若年性認知症者も含める必要があると考えた。そして認知症者が地域で生活する期間を少しでも長く出来るよう、地域での活動場面と外来診療という医療場面を取り上げ相互行為の構造と秩序を探求し、その成果を活用したコミュニケーションスキルの開発を目指す。さらにコミュニケーションスキルも多様であることから、意思を尊重するには認知症者自身が意思を表出しやすくすることが重要と考え、そのためには自分らしくある感覚、つまり本来感（伊藤・小玉, 2005）を高めるコミュニケーションスキルの開発に重点を置くこととする。

２．研究の目的

活動場面と医療場面（外来診療場面）における認知症者の相互行為の構造と秩序を明らかにすることである。そして、認知症者の本来感を高めるコミュニケーションスキルを開発することを目的とする。

３．研究の方法

平成 25 年度からの 3 か年にわたる研究計画は以下の通りである。

研究①：平成 25 年度は、若年性認知症者の活動場面における相互行為の構造と秩序を明らかにすることである。

研究②：平成 26 年度は、高齢認知症者の活動場面における相互行為の構造と秩序を明らかにすることである。

研究③：平成 27 年度は、若年性認知症者および認知症高齢者（以下、認知症者とする）の医療場面（外来診療場面）における相互行為の構造と秩序を明らかにすることである。

(1)研究デザイン

質的記述的研究である。

(2)研究参加者

研究参加者は若年性認知症者および認知症高齢者と施設のスタッフあるいは医療者である。

(3)データ収集

ビデオカメラ 2～4 台による定点撮影を行う。

(4)データ分析

撮影した録画を繰り返し視聴しトランスクリプトを作成、どのように相互行為を行っているかを会話分析する。

(5)倫理的配慮

研究①～③は研究参加者と研究フィールドが異なるため、それぞれに研究代表者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

研究①：若年性認知症者の活動場面における相互行為の構造と秩序を明らかにする（承認番号 2013-96）

研究②高齢認知症者の活動場面における相互行為の構造と秩序を明らかにする（承認番号 2014-101）

研究③：認知症者の医療場面（外来診療場面）における相互行為の構造と秩序を明らかにする(承認番号 2015-63)、医療施設側の倫理委員会（承認番号　第 82 号）

４．研究成果

研究①：社会参加を支援する活動の場において、若年性認知症者が他者とどのようにコミュニケーションを行っているかを明らかにすることが目的である。

若年性認知症者が活動を通じて社会参加する場において、若年性認知症者 6 名、男性、50 代後半～60 代後半、アルツハイマー型認知症、要介護 1 あるいは 2。支援者 3 名、女性を研究参加者とし、撮影したビデオデータを会話分析した。

若年性認知症者１名と支援者１名による毛糸玉をほぐす場面における相互行為を分析した結果から明らかになったことは、若年性認知症者は指示を得て「話し手－受け手」という役割を交代しながら動作を行っていた。

若年性認知症者が支援者の指示に応じた手の動作を実施できない場面が多くなると、『要請－受け入れ/断り不明（沈黙）』『評価－同意/不同意不明（沈黙）』の隣接ペアが増えた。指示に応じた手の動作が出来た場面では『要請－受け入れ』『評価－同意』の隣接ペアが見られた。

以上より、作業を開始するとき、若年性認知症者に作業目的の明確な説明や、出来上がりの状態を示す実際の品を提示することが理解を助けることが考えられる。支援者の指示に応じた手の動作を実施できない場面が多くなると増えた『要請－受け入れ/断り不明（沈黙）』『評価－同意/不同意不明（沈黙）』は、指示に応じた動作を継続しているが発話しないことで『要請－断り』『評価－不同意』を示していると考えられる。

研究②：社会参加を支援する活動の場において、若年性認知症者が他者と行うコミュニケーションの中で、笑いについて検討することが目的である。

若年性認知症者が活動を通じて社会参加する場において、若年性認知症者 6 名、男性、50 代後半～60 代後半、アルツハイマー型認知症、要介護 1 あるいは 2。支援者 3 名、女性を研究参加者とし、撮影したビデオデータを会話分析した。

研究参加者たちが座って会話している場面において、若年性認知症者 1 名が歩き慣れている自宅の近所で迷子になった見当識障害のエピソードを語った。認知機能障害の進行を露呈する内容であり、本人にとって受け入れがたく深刻なことであるにもかかわらず、発話者と参加者は笑い話としていた。

若年性認知症者自らによる見当識障害の提示と他の参加者によるユーモアにより生じた笑いには、不本意な現実、否定的な現実を無化していくことにより自己を救済する働きが考えられる。また、笑いを交わすその背景には、会話が交わされる人々に同じ価値観が共有されることが条件となる。つまり、若年性認知症者と支援者の間に同じ価値観が共有されていることにより、笑いというパッシング（取り繕い）と共に笑うというパッシングするケアが成立すると考えられる。このことは、若年性認知症者の本来感を高めていることが示唆される。

研究③：医療場面における認知症高齢者・家族と医師との相互行為を明らかにすることが目的である。

医療機関で外来診療を受ける認知症高齢者と付き添い家族の各 5 名、診療する医師 4 名を研究参加者とし、撮影したビデオデータを会話分析した。

外来診療場面において、認知症高齢者と付き添い家族と医師による行為連鎖では、「呼びかけ－応答する」、「質問する－返答する」、「依頼する－承諾する」の隣接ペアが多く見られた。認知症高齢者にはパッシングという印象操作が見られていた。認知症高齢者は医師による質問に対する返答として、付き添い家族を指名するというパッシングを行っていた。これに対し、医師は認知症高齢者の面子を保つために行う丁寧な配慮としてパッシングするケアを行っていた。

認知症者が住み慣れた地域で生活を続けていくためには、認知症者と関わるケア提供者が認知症者の意思を尊重することが重要と考える。そのためには認知症者が自らの意思を表出しやすくすることが重要と考えた。自分が自分らしくある感覚、つまり本来感（伊藤・小玉, 2005）を高めるコミュニケーションスキルの開発に重点を置いて研究に取り組んだ。

研究成果から明らかになったことは、認知症者の本来感を高めるコミュニケーションスキルにパッシングとパッシングするケアが関連していることである。2012 年に認知症者が自らの認知機能障害によりスティグマが貼られることを回避しようとパッシング（取り繕い）という印象操作を行っており、その認知症者の面子を保つために行う丁寧な配慮としてパッシングするケア（出口,2000）が行われている場面を報告した（千葉）。今回は、認知症者のコミュニケーションスキルとして、パッシングには笑いやユーモアがあり、パッシングするケアには共に笑うことがあることを明らかにした。また、認知症者がパッシングすることが、パッシングするケアの契機となっていることも考えられる。

会話が交わされる人々に同じ価値観が共有されること、つまり、認知症者とケア提供者の間に同じ価値観が共有されていることにより、パッシングとパッシングするケアが成立すると考える。

研究者は認知症者が自分らしさを、自分自身に対する本当さをできるだけ保つことが本来感を高めることになると考える。そのためには、認知症者が自らの感情や思考を捉え、自分の意思に基づき率直に行動できることが重要であろう。今回の研究フィールドは、認知症者を支援する活動の場や地域と密着した医療機関での医療の場であった。そこでは認知症者と関わるケア提供者は親密な関係が築かれており、認知症者は自らの感情や思考の表出および率直な行動を行いやすい環境であることが考えられる。

認知症者は自らの認知機能障害を露呈させないコミュニケーションをもつこともあれば、露呈させてコミュニケーションをもつこともあった。共通することは認知症者とケア提供者の間に同じ価値観が共有されていることであろう。また、認知症者がパッシングすることが、パッシングするケアの契機となっていることが考えられる。これらより、認知症者のパッシングとケア提供者によ

るパッシングするケアにより認知症者の本来感は保たれることが考えられ、認知症者の本来感は対人関係の親密さや場の影響を受けている可能性が示唆された。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計 3 件）
①千葉京子、活動場面における若年性認知症者のコミュニケーション（第二報）、日本赤十字看護学会、2016 年 7 月 3 日、「日本赤十字北海道看護大学（北海道・北見市）」
②秋谷直矩、ケアをめぐる相互行為分析の射程と可能性、日本保健医療社会学会、2016 年 5 月 15 日、「追手門学院大学（大阪府・茨木市）」
③千葉京子、活動場面における若年性認知症者のコミュニケーション（第一報）、日本赤十字看護学会、2015 年 6 月 27 日、「日本赤十字看護大学（東京都・渋谷区）」

６．研究組織
(1)研究代表者
千葉　京子（CHIBA　KYOKO）
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：40248969

(3)連携研究者
小山　幸代（KOYAMA　SACHIYO）
北里大学・看護学部・教授
研究者番号：70153690

秋谷　直矩（AKIYA　NAONORI）
山口大学・国際総合科学部・助教
研究者番号：10589998